Culture

名古屋市で生まれた読書グループ「猫町倶楽部（くらぶ）」が、インターネットの会員制交流サイト（SNS）で仲間を増やし、全国規模の活動に発展している。2006年の創設から10年余がたち、今や18の分科会を抱え「日本最大級の読書会コミュニティー」を掲げる。若者の読書離れが叫ばれる中、たくさんの人を引きつける魅力とは―。名古屋駅近くで月1回開かれる分科会「名古屋文学サロン月曜会」におじゃました。（岡村淳司）

名古屋発 読書会が熱い

全国で活動 登録9000人「猫町倶楽部」

今月八日午後七時、名古屋市中村区名駅五の喫茶店「KAKO柳橋店」に三十～四十代くらいの男女四十人が集まった。毎回課題本があり、この日は遠藤周作の『沈黙』。マーティン・スコセッシ監督の映画が公開され、タイムリーな作品だ。

「僕は無神論者なので『神が何も答えてくれない』という疑問に共感できない」「私は何度も踏み絵を踏んだキチジローが好き。弱いけれど純粋な信仰だと思う」。五つのテーブルに分かれた参加者が、進行役の仕切りで二時間語り合った。

最後はグループごとにベストドレッサー賞を決めたり、本にちなむ音楽を聴いたりする。「文学おたくばかりの集まりにしたくない」と、読書以外の楽しみもあるのだ。三年前から参加する男性は「本好きだけど職場では本の話をする相手がいない。ここは自分と同じような人と盛り上がれる」と喜ぶ。

課題本について語り合う参加者＝名古屋市中村区で

猫町倶楽部は、建築リフォーム業を営む同市の山本多津也さん（五二）が、経営の勉強会を思い立ったのが始まり。〇六年九月の開始時は同業者や友人ら四人でビジネス書を読んでいたが、SNSで仲間を募ると若者の申し込みが殺到した。「四十代のオヤジの勉強会に若い人が参加したがるのが予想外だった。こういうニーズ（需要）があると知り、積極的に人を集めようと思いました」と山本さん。

今では東京や大阪、京都、福岡、金沢でも開かれるようになり、全体の登録者数は延べ九千人にも。ベテラン会員がボランティアで運営し、毎回百人規模になる集まりもある。発祥の地・名古屋では月曜会のほか、映画を鑑賞する「シネマテーブル」など多彩な分科会がある。

本を語る喜び共有 結婚例も40組超

初対面の者同士が本を介して自身の価値観を明かし合う―そんな読書会は、一人である読書と全く違う楽しみ方だ。仲間づくりにもうってつけで、これまでにグループ内で結婚した例は四十組を超えるという。山本さんは「特に奨励しているわけではないですが、それだけ深いコミュニケーションができている証しでしょう」と胸を張る。

読書離れや出版不況が深刻な中、この活況は何とも頼もしい。山本さんは「読書会というスタイルがもっと広まってほしい。自分のライフワークとして死ぬまで続けたいですね」と話す。活動の詳細はホームページ「猫町倶楽部」で。

課題本の著者名は割愛しました。あなたは何人わかりますか？　何冊読みましたか？

月曜会10年分の課題本（取り上げた順）

「こころ」
「高瀬舟」
「腕くらべ」
「痴人の愛」
「銀河鉄道の夜」
「雪国」
「堕落論」
「人間失格」
「仮面の告白」
「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」
「高慢と偏見」
「キャッチャー・イン・ザ・ライ」
「日々の泡」
「存在の耐えられない軽さ」
「キリマンジャロの雪」
「眼球譚」
「伝奇集」
「長距離走者の孤独」
「北回帰線」
「愚者の道」
「ティファニーで朝食を」
「罪と罰」
「美食倶楽部」
「眠れる美女」
「怪談」
「徒然王子」
「女装する女」
「高野聖」
「墨東綺譚」
「おしゃれ手帖」
「表参道のヤッコさん」
「アプレカランタン―いくつになっても失敗しないおしゃれ」
「萩原朔太郎詩集」「中原中也詩集」
「三四郎」「それから」「門」
「なんとなく、クリスタル」
「ブルー」
「冥途」
「百年の孤独」
「高丘親王航海記」
「ナイン・ストーリーズ」
「肌ざわり」
「鼻／外套／査察官」
「シカゴ育ち」
「不思議の国のアリス」
「銃・病原菌・鉄」
「きもの」
「春琴抄」
「小さいおうち」
「動物はすべてを知っている」
「黒髪／別れたる妻に送る手紙」
「ヴィヨンの妻」
「楽園への道」
「見えない都市」
「幽霊たち」「最後の物たちの国で」
「偶然の音楽」
「われらの時代／男だけの世界」
「それでも花は咲いていく」
「私という病」
「『いき』の構造」
「久生十蘭短篇選」
「恋とセックスで幸せになる秘密」
「ブラームスはお好き」
「城」
「夢十夜」
「競売ナンバー49の叫び」
「金閣寺」
「変身」
「ジーキル博士とハイド氏」
「日の名残り」
「書写人バートルビー」
「体の贈り物」
「火を熾す」
「江戸川乱歩傑作選」
「ショートソング」
「曽根崎心中」
「アフロ・ディズニー」
「アフロ・ディズニー2」
「ナジャ」
「モオツァルト／無常という事」
「小僧の神様／城の崎にて」
「ノルウェイの森」
「すべてはモテるためである」
「饕餮老人日記」「刺青／秘密」
「三つの小さな王国」
「春昼／春昼後刻」「潮騒」
「偶然のチカラ」
「香華」
「愛人 ラ・マン」
「老子」
「第七官界彷徨」
「ロリータ」
「猫町／他十七篇」
「地下室の記録」
「舞姫／うたかたの記／他三篇」
「カラマーゾフの兄弟」
「少女地獄」
「父の遺産」
「贅沢貧乏」
「火葬人」
「問いのない答え」
「もう一度」
「海うそ」
「族長の秋」
「陰翳礼讃」
「フラニーとズーイ」
「遠野物語／山の人生」
「ゴドーを待ちながら」
「グレート・ギャツビー」
「機械／春は馬車に乗って」
「演劇は道具だ」
「ニッポン戦後サブカルチャー史」
「時間のかかる読書」
「すばらしい新世界」
「33年後のなんとなく、クリスタル」
「素粒子」
「ぶらりぶらこの恋」「ミドリのミ」
「インド夜想曲」
「草枕」
「斜陽」
「椿姫」
「杳子／妻隠」
「ちいさな王子」
「好色一代男」「雨月物語」
「カフカ短篇集」
「神の子どもたちはみな踊る」
「黒い時計の旅」
「翻訳教室」
「コルシア書店の仲間たち」
「新カラマーゾフの兄弟」
「読まず嫌い。」「俳句いきなり入門」
「マクベス」「リア王」
「能の物語」
「わが悲しき娼婦たちの思い出」
「おくのほそ道」
「禅と日本文化」
「天使よ故郷を見よ」
「日はまた昇る」
「楽園のこちら側」
「こわれる」
「誕生日の子どもたち」
「銀の匙」「犬／他一篇」
「落語百選　冬」
「岸本佐知子編訳 変愛小説集」
「月と六ペンス」
「沈黙」
「蜘蛛女のキス」

時のおもり

人間は生きものである

JT生命誌研究館館長
中村 桂子
KEIKO NAKAMURA

進歩より進化目指して

この欄は、その時の社会の動きに眼を向けながらも、いつも、「人間は生きものである」という生命誌研究の成果を基本に置いて書いてきた。研究成果などと言ったが、これ以上のあたりまえはないほどのあたりまえのことである。

ところで、生きものであるとはどういうことか。完全な答えはないが、基本は、「生きている」ということだ。これもまたあたりまえのことだが。私たち自身はいつか死ぬ存在であることがわかっているので、「生きている」を続けるには、子孫にそれを託すほかない。自分自身が今生きることを大切にするだけでなく、次の世代、さらにはその次の世代が生きやすいようにすることも必要なのはそのためである。生命現象を研究していると、とにかくどの生きものもいっしょうけんめい「続いていこうとしている」と感じる。人間以外の生きものにも意志があるような言い方は科学にそぐわないと言われそうだが、こうしか言いようがない。

地球上の生きものは、一千万種を超すともいわれ、進化の結果、多様性を手にした。ところで、進化は進歩とは異なる。進歩は一つの価値観をもとに、すべてを一つの直線上で比較し、先進国、開発途上国という言葉に見られるように進んだものが優れているとされる。一方進化は、時間に伴うさまざまなありようへの変化を示すだけである。これに合う日本語は「展開」だろう。多様な生きものが相互に関わり合いながらネットワークをつくっているのは、これが「続いていく」ことにとても向いているからである。

・・・

進化の歴史の中で、興味深い事柄の一つが陸上進出である。海で誕生し、水なしでは生きられない生きものたちが、水から離れて新しい場へ進出し、新しい生き方を獲得していく過程は、挑戦としか言いようがない。水のないところで干からびない工夫をしながら陸はおろか空までもすみかを広げていったのである。陸で体を支えるのに必要な骨格を外側につくった昆虫は、体を大きくはできなかったが、小さいがゆえにさまざまな場所で暮らすことができ、みごとな多様化を示した。生きもの全体の70％近くが昆虫であり、成功者と言える。

一方、海に残った魚たちも水という最も生きやすい環境を生かし、多様で、しかも多くの個体を存在させている。残ったのは決して負け組ではないのである。進歩を求める中で、新しいことがすばらしい、大きいことがよいことだと思い込んできたけれどそこには限界がある。今、続いていくことを求めるなら、進歩ではなくさまざまな生き方が選べる進化の方向へと舵（かじ）を切るのがよいのではないだろうか。

ここで愛読書『あしながおじさん』（遠藤寿子訳・岩波書店）の主人公ジュディの言葉を引用したい。「あたしは、この一秒、一秒をたのしむつもりよ。そうして、たのしんでいる間は、自分が確かにたのしんでいることをはっきり意識してゆくつもりです」。大概の人たちは、ほんとうの生活をしていません。彼らはただ競争しているのです。地平線からはるかに遠くにある目的地（ゴール）へ行き着こうと一生懸命になっているのです。そうして、一気にそこへ行こうとして、息せき切ってあえぐものですから、現に自分たちが歩いているその途中の美しい平和な風景も目にはいらないのです。そうしてやっと着いたころには、もうよぼよぼに老いぼれてしまって、へとへとになってしまっているんです。ですから、目的地（ゴール）へ着いても着かなくても、結果に何の違いもありません」

本連載の私の担当は今回で終わりです。長い間ありがとうございました。